郡市等医師会だより

中津には“ファビオラ看護学校”がある

中津市医師会
酒　井　昌　博

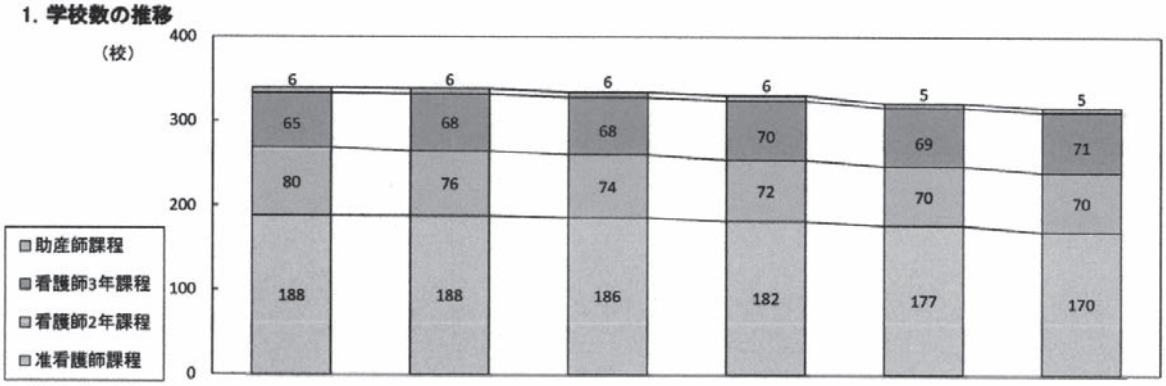
新型コロナ感染症拡大の中，各医療機関に於かれまして大変なご苦労をされて居られると察し申し上げます。そしてまた看護学校でも十分な看護教育を行っていくに大変な時期にあります。そのような中，中津ファビオラ看護学校の学生生徒は授業や看護実習に頑張っております。(表紙の写真は本校生徒の救急実習風景です)

今回，中津ファビオラ看護学校についてご紹介とその現状を報告申し上げます。私は10年前にも中津市医師会看護学校担当として中津ファビオラ看護学校を“ファビオラの風”と言う表題で本誌にご紹介させて頂きましたが今回再度ご紹介いたします。

校名の由来について説明いたします。本校の校名となった“ファビオラ”は，1,600年前（紀元390年）ローマに巡礼者のための救護所を設立，これは西ヨーロッパで最初の公共的な病院でした。彼女の活動は人々に大きい影響を与え，救護活動が愛の精神の最上のものであると教えたとのことです。ローマ貴族の出身で修道生活に入った後，生涯を慈善事業と病者に献身し，ファビオラは，病める人々のケアを献身的に実地に看護を行った先人として評価され，“人間愛・慈善・おもいやり”のファビオラの精神を受け継ぐべく校名にファビオラの名前を冠し，その精神を校訓としています。

中津ファビオラ看護学校は平成7年設立以来26年，さらに昭和41年前身の中津市医師会立准看護学院開校以来55年が経過し，約1,300名を超える看護師准看護師を輩出してきており，地元中津市を中心に看護医療体制の一助を担って来ております。准看護学科　定員30名2学年，看護学科定員40名3学年で，総勢180名の規模的に小さい学校ですが，昨年の准看護師資格試験・看護師国家試験は新卒生100％全員の合格ができています。2020年からのコロナ禍ではありますが学生・社会人の方が看護師を目指して本校を受験し昨年は准看護学科30名看護学科40名の定員をほぼ充たす事ができました。

全国の医師会立看護学校の最近の傾向とは思いますが，看護学校受験生は年々減少が見られています。
大きく定員割れをする看護学校もあり，医師会立看護学校の運営は大変厳しい状況となっています。
准看護学科に於いては，その課程の廃止を余儀なくされている看護学校も多く見られています。



	(N=345) 平成26年度	(N=338) 平成27年度	(N=334) 平成28年度	(N=330) 平成29年度	(N=321) 平成30年度	(N=316) 令和元年度
准看護師課程	188	188	186	182	177	170
看護師2年課程	80	76	74	72	70	70
看護師3年課程	65	68	68	70	69	71
助産師課程	6	6	6	6	5	5

（校）

令和元年　日本医師会　医師会立助産師・看護師・准看護師学校養成所　調査

令和元年　日本医師会　医師会立助産師・看護師・准看護師学校養成所調査（表参照）では5年間に准看護師課程は18校減，看護師2年課程は10校減となっています。
また令和元年の定員充足率（入学者／定員）の全国平均では，看護師2年課程82.6％，准看護師課程71％と定員割れが目立つ結果となっています。

中津ファビオラ看護学校も数年前には大きく定員割れをしていた時期がありました。
現中津市医師会長が看護学校担当時に看護学校教職員と検討し，入試の時期の見直しや社会人枠・学校推薦・社会人推薦等々を設定し，オープンキャンパスを各科複数回行う，ホームページの工夫等を行い中津ファビオラ看護学校を良く知ってもらい，中津ファビオラ看護学校を少しでも多くの看護師を目指す人に受験してもらうべく体制を整えました。はたして徐々にではありますが受験者数が増え辛うじてではありますが定員を充たす事が出来ています。

新型コロナ禍で受験生全体の数は減少しているようですが，入学試験面接で感じる事は“色々な思いを持って受験する年齢や背景は異なりますが受験生の看護や医療に対する気持に熱いものがあり”何とか彼らを看護師准看護師にと言う気持ちが湧いてきます。2011年東日本大震災後の入学試験では男子受験生が多く受験し“大きな災害を目の当たりにして自分も看護師として役に立ちたい”の気持ちが伝わってきました。この頃から男子学生比率が大きくなって来たと思われます。

中津市医師会立ですので地域で活躍する看護師准看護師を育成することが第一目標ではありますが，先ずは看護師になりたいと願って集まってきた人たちの夢がかなえられる場に“中津ファビオラ看護学校”があればと思います。一人でも多くの“人間愛・慈善・おもいやり”の気持ち“ファビオラの精神”を持つ学生生徒を育て，医療人として我々の仲間に加わってもらいたいと言う気持ちで教職員一同さらに多くの講師の先生方，医師会会員の先生方のご協力を頂きながら看護学校を運営しております。

表紙の写真の様に，学生生徒は授業・実習に目を輝かせて望んでいます。
中津にはファビオラ看護学校があり地域の医療・福祉を支える力となっています。
是非多くの看護師をめざす人が中津に集まり看護師として活躍して欲しいと願います。
中津には“ファビオラ看護学校”がある！　あります。

最後に，大分県医師会より看護学校への補助金等をはじめ御援助頂き誠に感謝いたします。
地域医療・福祉のため，看護学生の育成に努力していきたいと存じます。

郡市等医師会だより

『パンデミック最中の別府市医師会』

別府市医師会
平　川　雅　和

2021年末時点では，COVID-19は，比較的落ち着いている状態でしたが，本原稿をしたためている2022年の年明け早々，第6波が押し寄せております。オミクロン株は，以前より弱毒化し，重症化リスクは小さいとの報告もあり，加えてワクチン追加接種の一定の効果はあるのでしょうが，このパンデミックはいつまでつづくのかと不安になる2022年の始まりです。

年末年始の別府市には，比較的多くの観光客の方々が訪問，宿泊くださったようで，新しく開業されたホテルにも多くの部屋の明かりが見え，観光都市として少し回復傾向のようです。このままコロナ危機下で積み上がった過剰貯蓄が消費に回り，パンデミック以前よりも更に経済回復してくれることを別府市民として願うばかりですが，第6波による自粛再開が心配です。別府市医師会のCOVID-19感染拡大対策の主な活動としては，発熱外来トリアージセンターの開設，無症状の市民や観光客を対象とした別府市PCR検査センターのPCR検査を別府市医師会地域保健センターで請け負うことで，感染拡大防止に一定の役割を果たしていると考えております。

明るいニュースの少ない昨今ですが，別府市医師会では，昨年末に，嬉しい出来事がありました。別府市医師会の医療連携ネットワーク「ゆけむり医療ネット」により地域医療の効率化に貢献したとの評価をいただき，地域の保健衛生の向上に功績のあった団体等を表彰する第73回保健文化賞を受賞させていただき，天皇皇后両陛下への拝謁の上，贈呈式に矢田会長が出席されました。

医師会における主な変化として，従来医師会館で行っておりました検査業務を廃止し，会員からの要望により迅速性に特化した必要最低限の項目のみを医師会で行うスモールラボを医師会に昨年10月より開設しました。また，本年4月からは，従来運営してきました「別府市医師会看護専門学校」を「別府市医師会立別府青山看護学校」に改名し，3年課程（全日制）の看護師学校養成所を開設いたします。当校は，准看護学科と昼間定時制2年課程を併設しておりましたが，少子化による18歳人口の減少や，学ぶ人たちのニーズの変化に伴い，この度の課程変更に至りました。昨今の看護師に対する大きな期待やニーズに少しでもこたえられるような安心感を与える看護師を育成させていただく所存です。

最後に，私の個人的見解にはなりますが，COVID-19による医療機関への受診控えの影響かもしれませんが，受診時に進行がんや重度の心血管障害の患者様が増えたような印象です。早く，このパンデミックが落ち着いて，従来のように患者様が医療機関を受診され，我々も通常の医療提供体制へ回帰し，そして，何よりも観光都市別府市が再びにぎわってくれることを待ち望むばかりです。

郡市等医師会だより

大分市医師会　帆　秋　伸　彦

大分市医師会が運営するコロナワクチンの集団接種センターは，令和3年6月1日～7月19日，10月8日～11月14日の計2回の期間で集団接種を行いました。今回は，この集団接種センター運営の一連の流れをご紹介させていただきます。

5月10日に山本貴弘大分市医師会長と広瀬勝貞大分県知事との面会（写真1），5月31日に佐藤樹一郎大分市長の視察と全体予行演習を行い（写真2），6月1日から65歳以上の集団接種を開始し，6月8日に大分駅と帆秋病院会場間のタクシー送迎が開始されました。

また，東京五輪を迎えるにあたり，五輪派遣の警察官のワクチン接種を6月9日・10日，29日・30日と行いました。

6月1日～7日までの予約枠は468名，8日～10日までの予約枠は564名，6月11日以降の予約枠は600名に拡充し，1回目の集団接種センターでの接種回数は，延べ25,656回となりました。この時点で，大分市の65歳以上の約10％以上を接種することができました。

そして10月8日より，仕事の都合上，夜間帯でないとワクチン接種が難しい方や，ワクチン接種を希望しているがまだ接種できていない方がいる現状を踏まえ，2回目の集団接種センターを開所することとなりました。2回目の集団接種センターは，毎週金土日のみで，時間帯は金曜日は18時～21時，土曜日は9時～21時，日曜日は9時～17時で運営しました。10月22日には，新春対談（テレビ番組）の収録に伴い，佐藤樹一郎大分市長と賀来満夫教授（東北医科薬科大学特任教授）が視察に来られました（写真3）。

10月8日～11月14日までの予約枠は金曜日450人，土曜日1,530人，日曜日1,080人とし，2回目の集団接種センターでの接種回数は，延べ5,678回となりました。1回目，2回目の集団接種センターでのスタッフの人数は，医師が延べ210人，薬剤師が延べ51人，看護師が延べ455人，事務職が延べ319人でした。さらに，12月25日より帆秋病院会場では大分市の3回目の集団接種を予定しておりますので，皆様方のご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

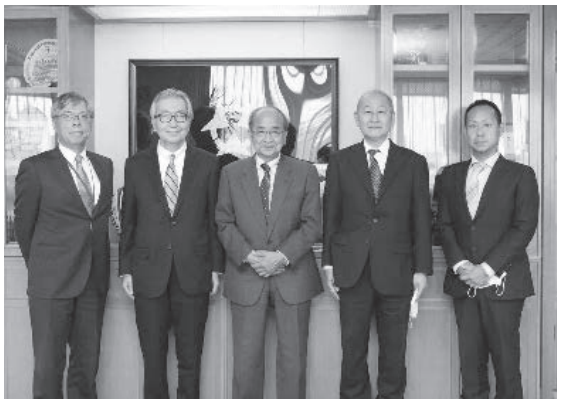


写真1　広瀬大分県知事と面会

写真2　佐藤大分市長が会場を視察

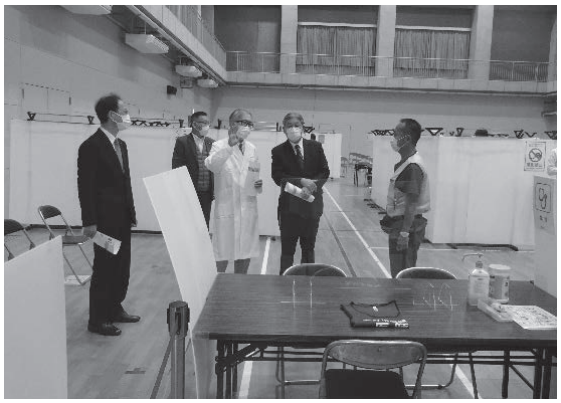


写真3　佐藤市長とともに賀来教授が会場を視察

郡市等医師会だより

『肌のぬくもりある医療』

宇佐市医師会
時　枝　正　史

宇佐高田医師会病院の玄関脇に，「肌のぬくもりある医療」と書かれた記念碑があります。黒みかげ石に彫り込まれた字は，初代院長・故桐田公弘先生の揮毫（きごう）によるものです。先生ご自身が入院された折，看護師の手の温かさに癒され，医療にはこのぬくもりが必要なんだと実感されたそうです。そしてそのことを病院朝礼などでたびたび話されていました。この言葉は当病院の基本理念となり，現在も全職員が日々精進を重ねています。

この2年間というもの，入院患者や施設入所の高齢者はなかなか家族に会うことができず，終末期の一番寄り添ってほしい時にさえ，そばにいることもままならない非情な事態でした。家族にとっても臨終に立ち会えないという大変つらい状況もありました。苦肉の策としてリモートによる面会などの工夫もありますが，耳元で声をかけたり，手を握ったりすることはできません。

一方，医療のICT化と称し推し進められているオンライン診療ですが，人とのコミュニケーションをもリモート化して，どうやって「ぬくもり」を伝えることができるでしょうか。それに日常診療において，我々医療人は検査データだけでなく，視診や触診，臭い，さらに患者の表情や変化からなんとなく感じる雰囲気など，五感をフル稼働して診察を行っているのであり，画面や音声の情報だけでは正確な診断を損ねる可能性があると思います。

私の漢方の師匠，織部和宏先生は腹診の講義で，「お腹をいきなりぎゅっと押さえてはいけない。手は温めて，優しくなでるように触っていくんだよ。そうすれば患者はリラックスして所見が表れやすくなる」とおっしゃいます。中には心地よくなり，それだけで心も体も楽になる患者もいるとのことです。これこそまさしく「手当て」であります。

宇佐高田医師会病院は今回の渦中においても，地域中核病院として確固たるホスピタルアイデンティティーのもと，立派にその使命を果たしています。設立からちょうど40年が経ち老朽化して来ました。数年後にオープンすべく建て替えの準備が進んでいます。しかし何年たっても，桐田先生の言葉を忘れないよう，わが医師会会員一同「肌のぬくもりある医療」を大切にしていきたいと考えています。

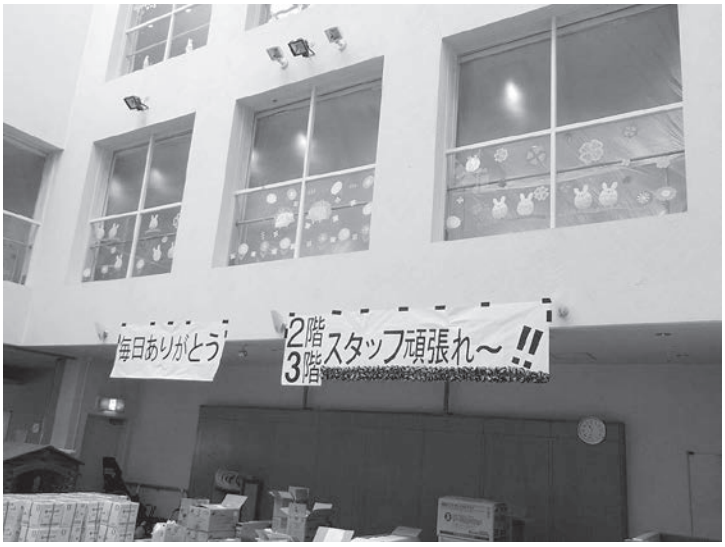
郡市等医師会だより

老健施設でのクラスターを経験して

日田市医師会
山　田　和　典

私が施設長を任されている介護老人保健施設聖陵ストリームで，予期せぬ30人規模のクラスターを経験したので，報告いたします。2021年4月，第4波の最中，日田市では一軒のスナックから広がったイギリス株の猛威にさらされていました。始まりは，保健所からの一本の電話でした。「コロナ陽性となった80歳台の女性は，お宅のデイサービスに通っています。」すぐに，県から頂いた抗原検査キットを使用し，デイサービス職員を検査したところ，1名が陽性で発熱を認めました。保健所の指導を受けながら，ウイルスの広がりを確認するため，ゴールデンウィーク中にデイサービス利用者・職員のPCR検査を経時的に2回行いました。利用者1名と職員1名計2名の陽性者は，日田市内の医療機関に入院となり，他に広がりはなかったので，5月6日には，これで収束したものと肩をなでおろしていました。しかし，ゴールデンウィーク明けの5月8日に2階旧館のショートステイ中の80歳台男性が突然発熱し，医療機関のPCR検査で陽性と判明しました。保健所からの指示で2階旧館有熱者（37度台）9名のPCR検査を行ったところ，5名が陽性と判明しました。更に，翌日には2階職員2名の陽性が判明。コロナウイルスは，デイサービス内で収束しているものと思っていたところ，突然，入所者から陽性者が発見され，ウイルスの広がりは施設全体に広がっているのではという恐怖がありました。施設内に少なくとも数十名の感染者がいるものと思われました。その時，日田市の医療機関はコロナ感染者の受け入れでパンクしており，大量の要介護感染者を医療機関にお願いするわけにもいかず，ウイルスを施設内に封じ込めることが最重要課題と思われました。大量の要介護陽性者を済生会日田病院のコロナ担当者の指導を受け，施設内隔離・対処療法を行うことに決定し，廊下に大きなビニールシートを用いてレッドゾーン・イエローゾーンを設定し，施設内隔離・ウイルス封じ込め策を行いました。最終的に入所者22名・職員7名が陽性でした。幸いクラスター発生時には，入所者は1回目のワクチン接種から約3週間経っており，2回目の接種を行う直前でした。呼吸不全や発熱持続に陥る入所者が少なく，施設内隔離は比較的容易でした。しかし，職員はほとんど接種しておらず，命がけの格闘となりました。私は病院でも診療していた為，ワクチンを2回接種していましたが，家族に「コロナにかかって，重症化したら人工呼吸はしないでいい」と伝え，診療に当たりました。職員には，「自分が感染しないことが最優先」と伝えました。家族から，「家に帰ってこないで」と言われる職員もいて，市内のホテルを長期使用契約し，帰れない職員は，そこに宿泊してもらいました。「コロナ感染者のいる施設に勤務しないで！仕事をやめて！」と家族から言われる職員も多く，半分くらいの職員が辞めるのではないかとの不安がありました。志願してレッドゾーンに入ってくれる職員で感染した入所者を介護・診療しました。職員皆，不安と恐怖の中，PPEを装着し感染した

入所者の介護・診療を毎日・毎晩続けました。ただ，保健所の方から定期的に職員のPCR検査をして頂いたことで，「自分は感染していない」と分かり，ほんの少し不安を和らげてくれました。保健所と連携して施設内ウイルスの広がりを調べたところ，入所施設4ブロックのうち，2階旧館の1ブロックのみの感染と判明し，肩をなでおろしました。陽性判明時には，軽症・無症状だった入所者のうち，4名が7–10日間経って，酸素吸入を必要としたため，医療機関に入院して頂きました。残念なことに，90歳台と100歳台の女性が亡くなられました。結果的には，23名の陽性入所・通所者のうち2名死亡。陽性職員9名はすべて軽症か中等症で回復しました。約一か月のコロナとの闘いの中で，食堂の使用とリハビリを中止し，居室内に閉じ込めたことから，入所者全員のADL・食欲が低下しました。コロナ収束の後，低栄養となり衰弱し亡くなる入所者も数名いました。今回，ファイザー製ワクチンを1回のみ接種した集団での施設内クラスターを経験しました。1回接種の効果で死亡者ゼロを目指して格闘しましたが，結果的に2名の死亡がありました。今回のクラスターで死亡率は少なかったのか？ワクチンを打っていなかったらもっと亡くなっていたのか？ワクチン2回接種した後だったら死亡者は出なかったのか？と疑問が残ります。職員全員が命がけで一生懸命頑張ってくれたおかげで，約一か月後の6月7日には，一人の離職者も出さずに収束を迎えたことに大変感謝しています。今後は，全国的に施設内クラスターが発生しないことを祈っています。



郡市等医師会だより

「時代の変化」

玖珠郡医師会
三　池　太　朗

2019年12月初旬に世界で新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の1例目が報告されてから数か月でパンデミックとなり1年8か月経過したが，現在（2021年8月25日時点）のところ収束の兆しは無く社会生活は大きく変化した。今回COVID-19だけでなく，どのような時代の変化が起きているか2019年に時計の針を戻し振り返ってみた。

2019年6月21日八村塁がNBA1巡目全体9位でドラフト指名をされ日本中が歓喜し，2020年1月27日Black Mambaの異名で知られるKobe Bryantが不慮の事故でこの世を去り世界は悲しみに包まれた。その後，COVID-19により様々なイベントが中止となりBLM，LGBTQの抗議活動等の議論がより一層行われるようになった。ある航空会社やアミューズメントパークでは「Ladies and Gentleman」のアナウンスが一部変更されており，今後は「Merry Christmas」も変更されるかもしれない。

東京2020オリンピックでは新種目として3×3，BMX，サーフィン，スケートボード，ボルダリングが追加（パリではブレイクダンスが追加される）され，閉会式ではBattle DJ世界一がDJプレイを披露した。どれもが日本では認知度が低く，これまで地上波でLive中継されたことは記憶にない。少人数で行える，スピーディーな展開，楽しさ，ファッション，BGM，ストリートからオリンピックという構図は現代の若者に支持されている理由であろう。また以前は悪とされていたゲームは今ではe-sportsに発展し，ゲームセンターでゲームしていた子が世界チャンピオンになる，スマートフォン1つで人生が変わるとは誰が想像出来ただろうか。

このように人種，性別，宗教，スポーツに対する考え方が短期間で大きく変化しており新たな時代の変化に柔軟に対応していかなければならなくなったと感じさせられている。

一方，変わっていないことの1つとして一部で昔ながらの指導方法が残っており，先日もスポーツ界で話題になっていたことだ。個人に問題はあるが一番は組織の問題だろう。医学は日々進歩しているがこのような指導方法が医療現場に無いことを切に願う。

最後に，COVID-19の1日も早い収束と先生方のご健勝・ご多幸を心よりお祈り申し上げます。

郡市等医師会だより

「チーム竹田」

竹田市医師会
安　永　正　剛

2020年6月に竹田市医師会会長に就任して，コロナに翻弄され続けながら一年が経過した。

竹田市では，各医療機関での個別接種に加え，竹田市医師会主導の下，各医師会会員医療機関スタッフ（医師・看護師・コメディカル・事務職），歯科医師会ならびに竹田市（保健師・救命救急士）の参加をいただき，「チーム竹田」を組み，集団接種を行った。これにより，12歳以上のワクチン接種希望者には9月いっぱいでほぼ接種完了の見通しがたった。

ワクチン接種業務に関し竹田市医師会として，竹田市民にできることはできたと自負している。

そこで医師会として次なるミッションに取り組み始めようと思う。

竹田市では少子高齢化・人口減少が著しい。毎年450人の方が亡くなる一方で，出生数は100人に満たない。竹田市の人口は2040年には2020年と比較し，約65％に減少すると推測されている。

しかし，減少するもゼロでなくそこに暮らす人々はいる。

この市民を守る医療と介護をどう担保していくか，20年先を見据えて市さらには介護業界とも協議を始めたい。

お互いの利害関係が絡む話である。

しかし，資金的にも，人材的にも限りがある。なにより，市民の理解も必要である。

この問題は，竹田市が先んじてはいるが，遅かれ早かれ全国に拡まる。

竹田市医師会から，いい発信をしていけたらと思う。

先日集団接種会場で一市民から「お世話になります」と栄養ドリンクをいただいた。とても嬉しかった。

「チーム竹田」の一員として，竹田市民にできることは，今後も積極的にしていこうと思う。

郡市等医師会だより

豊後大野市医師会より

豊後大野市医師会
福　島　幹　生

皆様，昨年から続くコロナ禍，ワクチン接種の対応の中いかがお過ごしでしょうか？令和2年4月より豊後大野市医師会の理事を務めさせて頂いております，福島幹生と申します。

当医師会は，約3万5千人の医療圏に病院3，診療所24（会員数60人）で構成されています。豊後大野は，古くから農業を基幹産業として発展してきた長閑な地域です。コロナ禍となってからの医師会活動は，様々な制限がなされました。これまで行っていた講演会や啓蒙活動も行うことが出来なくなっています。理事会は，通常の議題に加えワクチン接種や新型コロナ対策について討議されるため，毎回夜遅くまで行われます。医療圏が小さいこともありますが，諸先生方のご尽力のおかげで65歳以上のワクチン接種率は大分県内では2番目となっています。（6月20日時点で1回目接種率61.6％，2回目接種率26.3％）

今回のコロナ禍で，豊後大野市医師会でひときわ活躍してくださっているのが，医師会事務長の足立さんです。非常に明るく力強い女性で，上手く会員の意見を調整し県政との潤滑油となってくれています。その人格や努力は皆が認めるところで，彼女に頼まれれば皆やむ無しといったところです。彼女のような裏方がいるからこそ，豊後大野市医師会が円滑に運営できているのではと感じております。

1918年から1920年にかけて，全世界に流行したスペイン風邪（H1N1亜型インフルエンザ）。当時のことを調べてみると，新型コロナウイルスと同じように第2波でウイルスは変異し致死率が高まりました。当時も休校や行動制限などの措置がとられ，医療スタッフの切迫した状況も同じだったようです。そして残念ながら集団免疫を獲得するまで繰り返し流行をきたしました。新型コロナウイルスも，ワクチン接種下で集団免疫を獲得するまで収束できないのでしょうか。約100年が経過し，まさかこのような疫病が流行するとは夢にも思っていませんでした。コロナ禍がもたらしたもの。負の側面は計り知れませんが，当医師会は一つに纏まり乗り越えようとしています。その根底には市民の命を守りたいという医師としての強い使命感があるからです。ワクチン接種も益々多忙となりますが，接種後の患者様の安堵した表情を見ると前向きな気持ちにさせられます。憂いのない春を迎えるまで尽力していきたいと思います。

救患若一　所憂同也　同舟渡海　中流遇風

郡市等医師会だより

初代佐伯市医師会長

佐伯市医師会
岡　本　鎮　彌

佐伯市医師会は日露戦争が勝利の下に終わる明治38年，初代会長となる御手洗良慥（安政5年［1858年］～明治45年［1912年］）によって発足された。多くの他地区医師会が明治40年の医師法施行後であった為，全国に先駆けての発足であった。発足当時佐伯市の名は未だなく「南海部郡医会」と称していた。

この頃本部は医師会長宅にあり会務もそこで行われていた。全己堂御手洗医院は佐伯市城下西町696-1-2にあった。明治24年12月1日，佐伯藩の城代家老をしていた戸倉織部より売買により購入している。現在の大分銀行佐伯支店の立地である。

良慥の生家は代々米水津村色利浦の大庄屋を務めていた。初代は清原朝臣高木興七郎，寛文4年［1665年］で良慥の長兄想太郎は16代目である。妻は蒲江浦の江戸時代からの医家袋野家から嫁してきたフジであった。幕末の2代前ぐらい佐伯藩の達しで高木から御手洗に改姓したそうである。次代17代の大八には子供が出来ず，相次いで養子をもらったが二人目の養子寅雄は朝鮮に出稼ぎに行った際そこで死亡し，その時家系図も亡失。高木より御手洗への変更の年月日も不詳となってしまった。直系は大八で終わりになる。

想太郎の次弟鉄五郎は15代善三の弟平大の養子となり三男良慥は東大医学部の前身を卒業し医師に成る。姉妹のトミは上野村々長の出納穂佑に嫁し，ゲンは米水津竹野浦の庄屋御手洗愛平に嫁ぎ弁護士となる一徳を儲ける。その息子一而はこの地方の歴史小説を書いた文筆家だが，小説は必ずしも史実ではない。フミは畑野浦庄屋三原貢蔵に嫁する。

色利浦の先に宮野浦という村がある。先覚者山田俊郷（天保2年［1831年］～大正10年［1921年］）はそこで生まれた。祖父善右衛門の「家を興すは医に如くはない」の言葉に佐伯藩の蘭医三江元節の門に入る。藩の重臣矢野光儀の長男（後の矢野文雄）に種痘し佐伯地方の嚆矢となる。慶応2年長崎の蘭医マンスヘルト，次いで明治3年大阪の蘭医ボードインに学び近代医師となる。その後西南戦争や台湾征伐に従軍，大阪鎮台病院課長等数々の職を歴任している。山田家は従来大庄屋御手洗家の会計をしており，良慥が医師を志したのはその辺に鍵があるように思える。

私の祖父金作（文久元年［1861年］～昭和9年［1934年］）は山田俊郷について上阪し，氏の作った緒方惟準校長の博済医院附属医学校で学び，明治17，18年の内務省医術開業試験に及第し医師となる。16代御手洗想太郎の長女トミと婚姻し，明治18年7月22日，本籍地蒲江浦にて開業する。

妻の叔父である良慥とは昵懇の間柄であり，その縁であったのか長女貞子は良慥家から道を隔ててすぐ前にあった，佐伯藩の御用商人をしていた今泉家に嫁ぐこととなる。結納の目録には良慥と妻文子の白銀一包が熨斗と共に記載されている。

良慥は明治45年1月24日55才で急逝する。墓は養賢寺にある。御手洗家は女系家族で娘節子も東大医学部卒の文雄と結婚，文雄は文芸に秀でていたのか，一校のボート部の歌を作っている。卒業すぐ慈恵医大病院で手術中，患者のコレラに感染し辞世の句を残して死去する。辞世の歌はやはり養賢寺にある墓碑に刻まれている。孫良子は甥一徳の世話で安藤一視を婿養子とする。一視は戦前台北にいたが，戦後鶴谷中学，宇佐高校，津久見高校，上野丘高校の校長を歴任。その後佐伯市助役を一期務めている。子供たちも優秀で長男，次男は医学部ではないが，東大卒。三男は慶応大学を卒業している。その後のことは現在の人達に近くなり個人情報にも係わってくるので割愛させていただきます。

以上が初代佐伯市医師会長に関する顛末です。良慥及びその家族と祖父金作とが交わした郵便物が多々残されています。また大正期に入って金作の長男の婚姻に際しては，妻の文子が遥々と蒲江まで来て出席しています。その頃は船便であったようです。

写真

色利浦の先にある宮野浦地区から観た元越山。標高582m, 1893年（明治26年）佐伯鶴谷学館に赴任した国木田独歩も下宿先の窓から眺め，一年足らずの短い滞在期間に2度登り「元越山に登る記」にその眺望のすばらしさを書いている。この山の左下辺りが色利浦になる。

郡市等医師会だより

大分東医師会より

大分東医師会
佐　藤　美由紀

令和2年4月に大分市城原に開業し，大分東医師会に入会させて頂きました佐藤美由紀と申します。会長の澤口博人先生のもと，大分東部地区の地域医療のお役に立てるようにと，日々精進しております。

大分東医師会は大分市東部に位置する大在地区，坂ノ市地区，佐賀関地区からなり，会員数は83名です。人口は約5万7千人で，この数年子育て世帯の増加に伴い，緩やかに増加していることもあり，たいへん活気のある地区だと感じております。

この度大分東医師会より原稿と表紙の写真をとご指名頂きましたが，土地勘がなく，何の写真にしようかと悩んでおりましたら，当院併設の児童発達支援センターの子どもたちが近所の古墳公園へ遠足に行くというのでお昼休みに合流して撮影しました。写真は当院から車で3分程のところにある亀塚古墳です。亀塚古墳は5世紀初めに造られた，県下最大規模の前方後円墳で，全長116m（前方部52m，後円部64m），後円部の高さは10mにもなります。古墳の各段にはたくさんの埴輪が並んでおり，その埴輪を見ながら後円部を登っていきますと，墳頂からは別府湾を一望することができます。1996年に国の史跡に指定されてから亀塚古墳公園として整備され，敷地内の海部古墳資料館には出土品や当時を再現したジオラマ等が展示されています。ご近所にこんな素敵な場所があったのか，という驚きとともに，先人たちがつくりあげた古墳の周りを楽しく走り回っている子どもたちを見ていると，一日も早く当たり前の日常が送れるようになることを願わずにはいられませんでした。

最後になりますが，新型コロナウイルス感染症治療に最前線であたって下さっている諸先生方はじめ医療スタッフの皆様には心より感謝申し上げます。まだまだ未熟な身ではございますが，微力ながら医師会や地域医療に貢献してまいりたいと存じます。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

郡市等医師会だより

医師の気概

大分郡市医師会
釘　宮　誠　司

昨年はコロナに開けコロナに暮れ未だ医師とコロナとの戦いは続いています。大分市・由布市民に対し大分郡市医師会は大分市・大分東医師会と連携しコロナへの対応にあたっています。

R2.5.18には大分市城址公園にPCRステーションを開設しましたが，この際大分市から検体採取の依頼がありました。当初は3医師会の理事で行うかと思案しておりましたが，なんと一瞬で先生方の率先したご協力を頂き令和3年3月まで毎日医師1名による検体採取が実施されました。医師としての強い使命感を目の当りにし感動したことを思い出します。

以来市民は発熱時は必ず電話でかかりつけ医や地域の医療機関へ連絡するという診療ルールを守り，地域のかかりつけ医はコロナ感染症治療に全力で取り組み，大分市との協働でかかりつけ医から始まるコロナ感染症への地域医療提供体制が確立した次第です。

年末年始の休日夜間当番医療については，コロナとインフルエンザの同時流行を想定し発熱外来，通常外来と二次救急医療機関との連携で例年の3倍の医療体制を構築し実施する事が出来ました。これに於いても医師としての高い見識で年末年始の医療提供体制が構築できたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

さて，次なる課題はコロナからの解放を目指す円滑なワクチン接種の実施です。

これも行政との綿密な議論の末，大分市は個別接種を原則とし市民に対し地域のかかりつけ医によるワクチン接種を実現すべく基本型接種施設とサテライト型接種施設である地域のかかりつけ医に積極的な手挙げをお願いし，現在200を超える医療機関の協力を頂き長期に渡るであろう接種の円滑な実施が可能となるものと考えています。これに伴い，かなりの人力を注がなくてはならないワクチンの予約についても，大分市連合医師会が共有する市民とかかりつけ医を繋ぎ病診連携を図る「おおいたかかりつけ医ネット」に予約システムを加えることで円滑な運用がなされるものと考えています。

ところで今回のコロナ危機の経験は，かかりつけ医から始まる地域医療提供体制の構築が堅固なものであれば，想定外のいかなる国難が発生してもなんとか乗り切れると確信をした次第です。

4年後にせまった2025年問題や地震，自然災害に準備して来た地域のかかりつけ医から始まる地域医療提供体制がはからずも作動し良い結果を得ることが出来ました。

巷ではポストコロナの議論が活発になされています。

テレワークやICTがもたらす日常生活の変化はもちろん時代が求めているものではありますが，変わってはならないものがあると私は考えるのです。それは病める人に対峙する「医師の気概」です。ここぞの危機に集合し力を合わせいかなる艱難辛苦も突破する「医師の気概」です。

今回のコロナ危機の困難にくじける事のない強い意気を持つ同志の先生方の気概に強い感銘を覚え感動した次第です。

郡市等医師会だより

Progress

速見郡杵築市医師会
熊本　庄二郎

当医師会は，約6万人の医療圏に病院6，診療所32，（会員数74名）で構成されています。緩やかな人口密度なため，私にとっては仕事もしやすく，会員同士は程よき距離を保ちつつ，ご近所さん感覚で互いを受け止め，励まし合いながら歩んでいる，そんなふうに私は思っています。

現在（2月末）は新型コロナウイルスのワクチン接種へ向け，急ピッチで準備を進めています。行政や関係各所とも調整しながら，4月以降，いよいよ接種がスタートします。当院のような小規模医療機関で対応できるのか，まるで大海原にゴムボートひとつで投げ出された気分の春を迎えます。

さて，愚痴ばかりを書いてもつまらないので明るい話題に転じます。昨年4月，当院前に薬局ができました。同局最強のセールスカードは何といっても30歳前後の新婚薬剤師夫婦（私とは縁故関係なし）が営んでいるという点です。開局後即緊急事態宣言になったので，隣同士とはいえ会食もできず，ソーシャルディスタンスを保ったまま時は流れました。私が応援できることは当院の繁栄あるのみ。薬局は処方箋を介しての受身医療。夏になる頃，先輩風を吹かせ「君たち若いんだから，もっと前へ出て何かアピールしてみては？」と言ったところ「今度マルシェをしようと思います」とチラシを持ってきました。「マルシェ？何？」と返せば，休日の薬局で知り合いの雑貨店や菓子屋と共に，夫婦は“薬剤師体験”や“家庭でできる補水液作り”等のワークショップを企画し，近所の大人や子供に声をかけ，人寄せをするとのことでした。一度で懲りるか，と思いきや好評につきシリーズ化，季節開催となっています。また逆に地域のイベントへ出前参加，“おもしろ化学実験”をしてみたり，LINE処方受付に，FacebookやInstagramの活用，先日は，「会合で訪問薬剤指導について発表してきました」との報告を受けました。時々患者さんからは「あの薬局へ行ったら，聞いてもないのに薬についてあれこれ説明してくれて血圧まで測られ逆に不安になりました」とのクレームがこちらに飛んできます。私は「ふ〜ん，じゃあこちらからそれとなく言っとくね」と年長者の余裕ある対応（？）で流しています。そんなこんなで年が明け，夫婦には第一子が誕生し，新しい生命とともに当院へ報告にやってきました。“若いって素晴らしい！”と手放しの賞賛ばかりもしておれず，“こちらも（負けずに）もっと前へ…”大いに刺激を受けるこの頃です。地域医療に新しい風を感じています。

今月，過疎化に苦慮する当地行政から将来の人材確保は大丈夫か？医業継承についてはどうお考えか？というアンケート調査がありました。コロナ問題や薬局の若人たち，今回の寄稿依頼（＝プレッシャー）等に思いを巡らすなか，“何とかなる，何とかする，先ずはやるしかない”という前傾姿勢で歩もう，との思考転換に至りました。